慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「同定」と「属性付与」 の一構文
Sub Title	Une construction "identifiante" et "attributive"
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1987
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.136- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「同定」と「属性付与」の一構文

川口順二

0. はじめに

本稿は例文 (1), (2) で示されるような構文についてのノートである*)。

(1) Miss Bligh, *en qui Tuppence reconnut la bénévole fleuriste rencontrée plus tôt à l'église*, approchait à pas rapides (A. Christie, *Thumb*, p. 95)

(2) Monsieur Welman, *je vois en vous un homme intelligent* (id. *Cypress*, p. 147)

すなわち, X, Y, Z という三つの人を指す名詞句と V という動詞がある時

(3) X V Y en-Z (一般に en-Z は V と Y の間にくる)

という形をとる構文である。これは考察の対象としてとりあげられたことが殆どなく未だに不明な点が多い。ここでは採集したデータの紹介とその整理の仕方を示唆していくことにする。

構文(3)は

(4) Z ETRE Y

という, コピュラ ETRE によって Z と Y を関係づける構文と深い関係がある。(1), (2) はそれぞれ

(1') Miss Bligh (=Z) ETRE la bénévole fleuriste rencontrée plus tôt à l'église (=Y)[1)]

(2') vous (=Z) ETRE un homme intelligent (=Y)

という (4) の形の関係を X にあたる Tuppence, je が判断の対象とし，その成立を認めることを意味している。このうち (1) は Z が Y と同じ人物であることの判断を示しており，「同定」identification を表わし，(2) では Y という属性を Z に付与する判断なので「属性付与」attribution d'une propriété を表わす，といえる[2,3]。

以下「同定」タイプ (I タイプ) (§. 1.) と「属性付与」タイプ (AP タイプ) (§. 2.) の例をあげてコメントを加えていく。

1. 「同定」タイプ

(5) Dans le hall de «Sans souci», Mrs Perenna donnait des instructions à une jeune fille en qui (en-Z) Tuppence (X) reconnut (V) celle qu'elle avait aperçue en grande conversation avec von Deinim (Y) (Christie, *N ou M*, p. 36)

(6) Je dois allumer l'électricité? dit un des trois hommes, en qui (en-Z) Lupin (X) reconnut (V) le directeur de la prison (Y) (Leblanc, *813*, p. 320)

(7) Mais je (X) ne puis voir (V) en lui (en-Z) l'énigmatique Mr Owen rendant la justice à sa façon et commençant par supprimer son épouse pour un crime qu'ils auraient commis de connivence (Y) (Christie, *Nègres*, p. 119)

(8) Derrière elle venait, portant ses clubs, un personnage en qui (en-Z) Neele (X) identifia (V) tout de suite Mr Vivian Dubois (Y) (Christie, *Seigle*, p. 54)

以上 I タイプの例である。このタイプの特徴は Y の位置にくる名詞句が固有名詞 (8)，定冠詞つき固有名詞 (7)，先行文脈で既に同定の対象となった特定の個体を示す定名詞句 (6)，関係節の示す特定の事行により同定される特定な指示対象を指す定名詞句(1)—つまり制限的関係節により同定される定名詞句—及び同じく制限的関係節により同定される指示代名詞 (5)，などであることである。他方 Z を見ると，既に同定されている人物を照応する人称代名詞 (7)，特定の人物を指す不定名詞句を照応する関係

代名詞 (5), (6), (8), そして固有名詞を照応する関係代名詞 (1), などが観察される。

以上の観察から次のようなことが云える。まず Z については，既に先行文脈で導入された個体であり，しかも〈X V Y en-Z〉文の直前に現われていることが多い。〈Z, en qui (en-Z) X V Y〉の型が多いのはその直接の反影である。又 (7) の lui はその指示対象が話題とされているコンテクストの中に現われている。従って Z はディスコース・トピックとして en qui の形で打ち立てられるか，又は既にこのステータスを持っているものを人称代名詞で照応する機能をになっている，といえる。実際 en qui の形で照応される Z は右方文脈で話題の対象としてうけつがれていくのが普通で，(1) は明らかであるが，例えば (8) は

(9) On pouvait le [=Z=Y=Vivian Dubois] situer du premier coup d'œil: un de ces messieurs qui «comprennent» les femmes, surtout quand elles sont pourvues d'un mari riche et déjà âgé.

と続いて，この後 Z である Dubois が会話に参加してくる。又 (6) は Lupin が幽閉されている独房に監獄長 (Z) が彼を脱獄させることになる VIP を連れてきた所の場面に位置するが，Z はこの後しばらく会話を続けた後はじめて退場する[4]。

次に Y を見よう。Y は I タイプでは必ず特定性をもつ。そして先行文脈において特定な事行への参加者としてか，又は他の形で同定されている。

従って I タイプは，既知の Z を既知の Y に同定する機能を持つといえる。これは一体何を意味するのだろうか?

V が reconnaître, découvrir など認識の分野に位置するものである，ということは，〈X V Y en-Z〉が全体として「X ガ，Z ガ Y デアルコトヲ認メル，発見スル」のような意味を持つことである。この時 Z はこの認識の判断が行なわれる時点で特定性を有してはいるものの，この特定性は必ずしも判断主体 X が Z を同定するのに充分であるとはいえない。例えば (6) では Lupin の独房に入って来た三人の者のうちの一人で「電気を

つけましょうか?」と訊ねた者が Z であり，判断主体 X，つまり Lupin は彼について特定性の判断を下せるわけだが，しかしもしこれが今迄会ったこともないような人物ならば「私ノ独房ニ他ノ二人ト一緒ニヤッテ来テ「電気ヲ...」ト云ッタ者」という情報しかないことになる。ある個体を同定する，ということは，その個体を特定化するに足る，既にストックされている情報をその個体に付与することであり，Lupin は問題の人物が既に特定的個体として認めている人物と同一であることを認識することによって Z を同定したことになる。

従って先に「既知の Z を既知の Y に同定する」と表現したが，「既知」の概念は Z に関する時と Y に関する時で異ったものであり，既に言及した Z のトピック性と関係してくる。判断の場面で，又はトピックとなっていて限定度の高い Z が，情報の上で安定度の高い Y に同定されるのである。

さて以上述べてきた I タイプの特性は，Declerck (1983) が〈Z ETRE Y〉構文で Descriptionally identifying (D-identifying) と呼んだものと共通するところが多い。この D-identifying に対して Specificationally identifying (S-identifying) と呼ばれるものがある。これは〈Z ETRE Y〉で，Z が variable を指示し，Y がその value を決定するタイプで，例えば

(10) The bank robber is John Thomas

では The bank robber (=Z) が variable を，John Thomas がその value を提示している。

既に見たように〈X V Y en-Z〉の I タイプは D-identifying のタイプと平行しているが，S-identifying のタイプに平行する解釈をとれるだろうか?

まず仏の en という前置詞について述べねばならない。現代語では en の用法が比較的限られており—しかしこれは productive でないという意味ではない—，en に続く名詞は定・不定冠詞を自由にとることができないのである[5,6]。従って Z が S-identifying 用法の〈X V Y en-Z〉構文

で用いられるための条件である，「Z は定名詞句である」という原則が満たされにくい。

この場合 en の代替として dans を用いることが考えられる。実際次の

(11) nous (X) n'avions pas tardé à reconnaître (V), *dans la nouvelle cuisinière de Daubrecq* (Z), votre vieille servante Victoire (Y), grâce aux indications de la concierge, que Victor vous donnait asile (Leblanc, *Cristal*, p. 141)

という例が採集された。これを ETRE 構文にすると

(12) La nouvelle cuisinière de Daubrecq (Z) ETRE votre vieille servante Victoire (Y)

となろう。しかし (12) の Z は Declerck の云う variable を提出しているとは考えられない。というのも判断の V が機能するためには，判断主体 X が判断の対象 Z を充分に同定している必要があり，variable を提示するような Z は許容されないからである。

しかし，もし上に述べた直観が正しいならば，判断自体が何らかのモダリティのスコープに入っていれば S-identifying のタイプが可能ではないか，と考えられるかもしれない。つまり「モシ X ガ，殺人犯人ガ太郎ダト認メレバ(事件ハ解決スルダロウ)」では発話時点に於て犯人 Z が同定されておらず，もしその後で X が Z は Y だという判断を下したならば云々と言っているわけで，従って発話時点での Z は variable を提示する可能性があるのではないだろうか？

(13) ?S'il y avait un témoin qui reconnaîtrait Taroo dans l'assassin (alors l'affaire serait réglée)

しかしながらこの解釈での (13) は不自然な文である。そこで現時点では〈X V Y en-Z〉の I タイプとしては S-identifiying のタイプのみが可能である，と結論せざるを得ない。

従って

(14) —ça ne m'ennuie pas, dit Neele. Seulement, je (X) voyais (V) en elle (en-Z) la criminelle (Y) (*Seigle*, p. 100)

と警察の Neele が犯人について見当ちがいを していたことを 悔やむ時, variable は Y の la criminelle であって Z の elle は同定されてしまっている対象なのである[7]。

2. 「属性付与」タイプ

「同定」タイプと「属性付与」タイプの違いは大きい。何よりもまず〈X V Y en-Z〉の Y が拘束された文型でしか定冠詞をとらない点が重要である。従って〈Z ETRE Y〉の形におきかえた時 Y が不定名詞句として現われることになり，これは Declerck のいう BE 動詞文の Predicational な用法に対応することが多い。

定冠詞は次の例で現われる。

(15) Il y avait dans sa voix un étonnant accent de persuasion et jamais il n'avait mieux personnifié, en apparence du moins, *l'honnête marin britannique que* (Y) chacun (X) voyait (V) en lui (en-Z) (*N ou M*, p. 233)

(16) Il (X) voyait (V) en elle (en-Z) *l'enfant qu'elle était demeurée en dépit de l'âge* (Y), sa foi dans les contes de fées où un homme et une femme qui se sont rencontrés «vivent heureux à tout jamais» (Y) (Christie, *Mr. Quinn*, p. 154)

(15) を構文的に見ると Y は関係代名詞 que であり，その先行詞が定名詞句である。(16) ではより明らかに Y が定名詞句として出ている。

(15)は〈XVY en-Z〉を主文にすると

(17) Chacun voyait en lui *un* honnête marin britannique

のように Y が不定冠詞をとることになり，前掲 (2) と同じ構文となる。一般に〈Z ETRE *un* Y〉の Y が不定冠詞を伴う時，Y を先行詞とする関係節は〈*le* Y que Z ETRE〉となるが，(17) から〈X V *un* Y en-Z〉

も〈*le* Y que X V en-Z〉となるのである[8]。

ETRE の例は

(18) a. Walter Hudd était transformé. *Le maussade garçon qu'il était naguère* avait fait place à un jeune géant souriant et toujours de bonne humeur. (Christie, *Jeux de glaces*, p. 185)
b. Il ETRE naguère un maussade garçon

のようなものである。ただし

(19) Terrence, par contre, *tout enfant qu'il était*, ne serait peut-être pas resté indifférent à la maladie de Ridgeway (*Vallon*, p. 68)
(20) *Tout honnête homme qu'il était*, Luigi n'en aurait rien dit à Maigret (Simenon, *Lognon*, p. 129)

のような譲歩節は Y が無冠詞で〈tout Y que Z ETRE〉の形をとる。又

(21) Une folie, si l'on considère qu'elle aurait très bien pu se tuer. Mais c'était là une hypothèse que, *comme une enfant qu'elle était*, elle n'avait pas un instant envisagée. (Christie, *Maison biscornue*, p. 185)
(22) Elle est partie sans me prévenir, sans rien dire à personne ! *Comme une petite saleté qu'elle est !* (*Seigle*, p. 98)

のように comme で導かれる比較節でも Y が不定名詞句であることがある[9]。

さて〈*le* Y que Z ETRE〉の構文は，これに対応する英語の構文が Hawkins (1980) で考察されている。この中で著者は次のような指摘をしている。すなわち the Y (that Z BE) の Y は affective なニュアンスを持ち，話者又は文中の人物の主観的観点を表わす。これは感嘆 (the genious that Mary once had been) 又は軽べつ (the fool that . . .)，もしくは憐愍，愛情，哀感，などの感情 (the sweet little child that Hary used to be) を示すもので，Y の名詞又はそれにつく形容詞の語い特性がこれを表現するのが普通だが，I recalled *the housewife* that Mary used to be

のように Y 自身がそのような要素を持っていない時でも I recalled the mere / fantastic housewife that . . . のように感情的な解釈を受けるという (p. 64～65, n. 3)[10]。仏でも (16), (18) や

(23) Ils vont probablement arriver cette semaine, pour voir *le trouble-fête que vous êtes* (Christie, *Nuit*, p. 117)

などが示すように affective なニュアンスが伴い，Y が語い的に感情を喚起しない名詞の時でも (24), (25) のように文全体としてはニュアンスを含む。

(24) «Si je mourais . . .»
Une immense tristesse l'envahissait.
«Et voilà *la femme que je suis!* John avait raison! Je ne puis pas arriver à porter le deuil! (*Vallon*, p. 254)

(25) — Alors, vraiment, ce que tu veux, c'est qu'elle partage ta vie, la vie de Lupin?
— La vie de *l'homme que je serai*, de l'homme qui travaillera pour qu'elle soit heureuse, pour qu'elle se marie selon ses goûts. (*813*, p. 495)

さて大分遠まわりをしたが，ここで〈le Y que X V en-Z〉に戻ると，この構文でも (15), (16), そして

(26) Il n'était pas assez naïf pour ne pas se rendre compte que Sophie n'était pas *la femme qu'il voulait voir en elle*. (Simenon, *Voleur*, p. 182-3)

のように Y が語い的に感情的要素を含まない時においても，文全体がそのようなニュアンスを含んでいることが観察されるのである。

この感情的ニュアンスを説明しない限り，〈X V Y en-Z〉の「属性付与」用法についての洞察は得られない。

この問題の解決にはまず Y が不定名詞句の場合を調査する必要がある。

興味深いことに，Y が不定名詞句の時も感情的ニュアンスが観察され

る。例文をいくつかあげてみよう。(2), (17), (18b) などと同じタイプである。

(27) Et puis, il y avait Mr Caspar. Il était encore plus facile de voir en lui *un personnage dangereux* (Christie, *Némésis*, p. 65)[11]

(28) Vous voulez voir en moi *un prestidigitateur qui tire des lapins d'un chapeau vide?* (*Coupable*, p. 121)

(29) Mrs. Baker était toujours grasse et souriante, mais plus tout à fait la même. Elle n'était plus une grosse femme futile, bavarde et insignifiante. On devinait en elle *une femme d'action, vraisemblablement dépourvue de souplesse.* (*Destination*, p. 82)

(30) Petite, bien en chair et les cheveux d'un joli bleu, Mrs. Calvin Baker écrivait des lettres, avec l'énergie qu'elle apportait à tout ce qu'elle faisait. Il était impossible de ne pas reconnaître en elle, au moins au premier coup d'œil, *une Américaine aux revenus confortables, et curieuse de tout.* (*Destination*, p. 50)[11]

(31) Marika crut reconnaître en lui *un autre orphelin de la vie.* Il avait besoin d'elle et par un curieux complexe de frustration maternelle, elle reporta sur lui son besoin d'affection. (Arley, *Ogresse*, p. 24)

(32) Je ne sentais en elle qu'*une mère* et me plaisait à me sentir son fils (Gide, *Grain*, *apud* Eriksson (1980), p. 175)

(33) J'étais surpris de découvrir en cette petite fille timide *une femme d'affaires accomplie* (*Nuit*, p. 65)

あえて数多くの例を挙げたのは，採集例の中ではこのタイプがもっとも豊富で，代表的だからである。

このタイプが感情のニュアンスを伴うことは例文から明らかであろう。これはいくつかの段階で観察される。まず V がモーダルな構文に置かれていることがある。(26) の voulait, (27) の il était encore plus facile de, (28) の voulez, (30) の il était impossible de ne pas, (31) の crut などがこのモーダルな要素である。次に Y の内部の評価的修飾がある。(2) の intelligent, (15) の honnête, (18a) の maussade, (27) の dangereux, (29)

の dépourvue de souplesse, (30) の aux revenus confortables, et curieuse de tout がこれにあたる。又 Y の中の名詞自身はというと，次にあげる例は評価的名詞である。

(34) Naturellement, si ma présence vous gêne, si vous voyez en moi *un intrus*. . . (Christie, *Trois actes*, p. 144)

(35) On voit en lui *un cabotin*, mais on se trompe (*ibid.*, p. 39)

最後に，(16) では l'enfant につく関係節 qu'elle était demeurée en dépit de l'âge, apposition の sa foi dans les contes de fées. . .が軽べつ的ニュアンスをもつし，(28) の un prestidigitateur qui tire des lapins d'un chapeau は比喩的であり，無理なことを望む聞手に対して皮肉な口調をとっている。

次にあげる例は夫々コメントを必要とする。

(36) Et tandis que vous étiez au Vallon, vous avez reconnu dans le professeur Christow un vieil ami à vous? (*Vallon*, p. 168)

(37) sans doute voyait-il en lui un étranger venu après l'habituelle saison touristique, et qui trouvait la rivière trop tardivement pour aller se promener sur une quelconque jetée. (*Témoin*, p. 8)

(38) Lorsqu'un enfant présente toutes ces dispositions, il est rare qu'il soit découragé par ses parents. Ils voient en lui un futur chef dont la jeunesse n'aura pas été source de complexes. (Sim, *Dieu*, p. 118)[12]

(39) Il reconnaît peut-être en elle un homme dont les traits lui sont familiers. Curieux d'apprendre la raison de cette mascarade, il se laisse entraîner sur le chemin. (Christie, *Sunningsdale*, p. 47)[13]

これらの例は評価という観点から見ると，すべて反例に見える。しかし (36) は vieil が感情的要素を文に加えている可能性もある。

(37) は sans doute が示すように推測の文であり，英語原文は

(40) He was conscious, or thought he was conscious, of a veiled

curiosity in the ferryman's eyes. *Here was a stranger.* And a stranger after the close of the tourist season proper. Moreover, this stranger was crossing the river at an unusual hour—too late for tea at the café by the pier (*Ordeal*, p. 8)

となっていて自由間接話法を用いている。

(38) の Y は un futur chef dont . . . の部分だが，ここで大切なのは futur である。つまり「X ハ Z ガ将来 Y ニナルダロウト思ッテイル」のであり，発話時点では Z は Y ではないのである。

(39) は非常に興味深い例である。これは事件を再構成しているところで，原文は

(40) Sessle comes towards the seventh tee, and the woman comes forward and speaks to him. *He recognises her, perhaps, as a man he knows masquerading.* Curious to learn [. . .] (*Partners*, p. 116)

となっている。これも推測のコンテクストである。

現時点では (36)～(39) の例をこれ以上分析できないが，夫々の V (reconnaître, voir) の特性と，そして上に言及した推測や話法に由来するモダリティが重要な要素であることは想像にかたくない。

以上の観察を基にして「属性付与」タイプの〈X V Y en-Z〉の感情的要素を検討してみよう。

既に何度も見てきたように，〈X V Y en-Z〉は〈Z BE Y〉と深い関係をもつ。しかしながらこの二つの文型は同義ではない。一方には X と V，及び en という要素があり，もう一方には BE が出ている。両者に共通するのは Z, Y, そして両項の関係づけとしてのメタ言語的な BE である。

まず en-Z の en はトピックの Z を導入すると同時に Z の特性を問題にするということをマークする[14]。この Z の特性が Y の位置におかれるわけで，Y 自身は文のフォーカスとして機能する。これは〈X V Y en-Z〉構文すべてにあてはまるものであり，重要な特性の一つである。いわゆる

attribut de l'objet 構文 (object に predicative element が付与されるタイプで，je le crois intelligent のような文である) と平行している[15]。

Y が Z の特性を示すわけだが，他方この特性は X が Z に認めて判断の対象とするものである。従って V は voir, reconnaître, deviner, découvrir など限られたものが来る。残念ながら V の位置に来る動詞のリストを作る作業ができていないので，これは今後の課題として残しておこう。

いずれにせよ〈X V Y en-Z〉は結局は X が Z に Y の存在，ある特性の存在を感知，認識することを示すのはまちがいない。一見反例に見える avoir と il y a については Kawaguchi (1980) で詳述しておいたので繰り返さない。特に il y a の場合は「同定」タイプがなく

(41) *il y a en elle Mme Dupont / la criminelle

などは許容されないことをつけ加えておこう。

感情的ニュアンスについては Y が Z の特性であり，しかも心理的操作によって感知，認識されるものであるという事実により説明できるとして，それでは何故この〈X V Y en-Z〉という一見複雑な構文が用いられるのかを考えてみよう。

本稿で採った用例は A. Christie の推理小説にあるものが多いが，これは将来対照研究を考えているからである。しかし現段階で既に明らかなこととして次のようなことがある。すなわち，仏〈X V Y en-Z〉構文にしばしば英〈Z BE Y〉という単純な形が対応するという事実である。たとえば(2)は

(42) You are a person, Mr. Welman, of sensibility and intelligence (*Cypress*, p. 113)

が原文である。

これは同時に，それではなぜわざわざ X を導入するのか，という問題につながっていく。

今発話主体と判断主体，という二つのメタ言語の概念を用いれば[16]，一般に小説の地の文は一人称小説でないかぎり omniprésent, omniscient な作家がニュートラルで話の筋にコミットしない書き方で記述するか，それとも作家がより積極的にでき事をコメントするか，もしくは登場人物の視点を自由間接話法を用いて述べるか，などの形で語られる。勿論これをよりソフィスティケートした技術も考えられる。しかし重要なのは，作品の背後に発話主体としての語り手を，たとえそれがいかに規定しにくい存在だとしても想定せざるをえないことである[17]。

〈Z ETRE Y〉はその判断主体がコンテクストによってしか知ることができず，果して発話主体が同時に判断主体なのか，それとも判断主体は登場人物の一人なのか，あいまいなことも多い。

〈X V Y en-Z〉の X はまさにこの判断主体を指すのであり，そして判断自体は V で示される。この構文は判断を登場人物 X にゆだねて発話主体はその蔭に隠れたままでいることを許し，従って判断が物語により強く密着したものになる。

(2) のような会話の中での用法をみると，ここでも話し手が同時に判断主体であることが明示されている。それに対し (42) は判断主体が話し手だけなのか，又はより一般的ないいなのかはあいまいなまま残る。仏と英の表現法の夫々の特徴，かたよりということができよう。

3. 結　　論

〈X V Y en-Z〉構文について採集した例文を整理・紹介してきた。この構文は，「同定」用法と「属性付与」用法があり，いずれも〈Z ETRE Y〉という関係をその判断主体 X に定位させる機能をもつ。「同定」タイプは Declerck (1983) のいう D-identifying の用法をもち，「属性付与」タイプは感情的ニュアンスが顕著である。いずれにせよ X による〈Z ETRE Y〉という関係の感知・認知を示すものであり，従って X は判断主体，そして V はそのような判断を示す動詞である[18]。Z と Y を結びつけているのは V であると同時に en である。

談話構造の視点から見ると，Z はトピック，Y はフォーカスということになる。発話的観点からいうと，X は〈Z ETRE Y〉の関係をテクスト内により定着に結びつける判断主体として機能し，発話主体と同定されることと，されないことがある。

以上がデータの観察により得られた結論であるが，始めに述べたように〈X V Y en-Z〉構文にはまだ不明な点が多い。特にデータの manipulation を殆ど行なっていないが，これは採集したデータの整理・紹介という本稿の目的に沿ったからのことで，今後は作例とその判断という方向に研究を進める必要がある。疑問文，否定文などの性質，その他のさまざまな統辞特性については，全く不明なところが多く，又 V の位置にくる動詞のリスト，そして各動詞の特性も調査を要する。又 X, Y, Z 夫々が人以外の時の構文にも調査を拡げる必要があろう。本稿はこのプログラムの第一段階として例文を整理したわけである。

註

*) 本稿は Kawaguchi (1980) でとりあげた，仏中世語での il y a の一用法についての考察を現代語に移して範囲を拡張して考え直したものである。過去の研究の少ないこの分野を調査するにあたって藤田知子氏と長時間にわたる議論をする機会を何回か得，貴重な示唆を受けた。又大木充氏からは文献についての情報を頂いた。両氏に深く感謝したい。

1) 表記の仕方から明らかなように，(1'), (2') は文ではない。ETRE はメタ言語的操作を表現したものであり，Culioli (1981) などに見られる localisation (定位操作) に対応する。本稿はデータの紹介を主目的とするのでこの概念を表面に出すことはせず，(1'), (2') のような直観的に理解しやすい表記を用いる。

2) be 動詞 être は種々の言語理論が夫々解釈を提出しており，これを紹介していくには多くのスペースが必要であろう。本稿では Declerck (1983) の記述を援用しているが，すべての点で賛成するのではない。特に Descriptionally-identifying と規定される用法 (Who's that man?—*That man is John's brother*) に独立したステータスを認めることは問題があると考えている。しかし〈Z ETRE Y〉構文で Z と Y が人を示す NP を取りあげているので非常に示唆的であり，得る所が多い。

3) 「属性付与」という用語はいささか曖昧である。Declerck (1983) の predicational「陳述的」用法に対応するが，〈Z ETRE Y〉構文の Y が名詞句で

も形容詞句でも同じステータスを与えられることになる。既に Kawaguchi (1980) で述べたように，Y が(否定)名詞＋形容詞の場合は Y が Z の「分類」を示すのであり，しかもこの分類は情報構造の見地からは given となっているのが〈X V Y en-Z〉の特性である。しかし〈Z ETRE Y〉の Y が名詞句の時との違いは今の所充分に解明できない。

4) ディスコース・トピックの概念については，Givón (1983) の諸論文参照。

5) en に無冠詞名詞句が来る場合は，

(i) Midge, *en fille pratique*, prononça des paroles de sagesse (*Vallon*, p. 238)

のようにある人の行為がどのような態度で行なわれるかを示す用法がある。本稿で扱う〈X V Y en-Z〉の Z が無冠詞で現われることはない。

又 en には人称代名詞が自由につくことができるが，

(ii) a. Une certaine amertume montait *en elle* (b. の仏訳, p. 124)

b. And suddenly a tide of bitterness rose *in her* (Christie, *Hollow*, p. 95)

のように心理的な動きを示す文中で心理主体をマークする用法が注目される。そしてこの用法と関係するのが〈X V Y en-Z〉で Y が人ではない用法である。

(iii) a. mais il (X) ne pouvait trouver (V) *en* lui (en-Z=X) la force qui l'eût mis debout (Y) (b. の仏訳, p. 36)

b. John Christow was nevertheless unable to force himself to get up (*Hollow*, p. 25)

このタイプでも心的，内的な動きが問題となる。この場合無論〈Z ETRE Y〉との関係は崩れてしまい，むしろ〈Y ETRE en-Z〉との関係が現われる。なお次の注で言及する en の歴史的与件は西語には起っておらず，従って定名詞句が en に続きうる。

(iv) a. Je voudrais savoir si, en ces derniers temps, vous aviez remarqué *en lui* quelque changement (*Seigle*, p. 27)

b. Quisiera saber si últimamente ha notado alguna cosa extraña *en el señor Fortescue* (p. 31)

6) 簡単に歴史の中での en の用法の変遷を見ておこう。en は (<Lat. *in*) は定冠詞男性単数形が次に来ると，*el, ou* の形をとるに至り，最後の形は場所の副詞 *où* (<Lat. *ubi*) と同じになって消失していく。又定冠詞男・女複数形が次にくると *ès* となりこれも現在では化石的にしか残らない。*en*＋定冠詞女性単数形 *la*，又はその縮約形 *l'*—これは男女同形だが—は比較的良く抵抗したが，これも現在では限られた用い方をされることが多く，特に書き言葉で余命を保つ。

en の用法が限定されるとその代替として dans が用いられることが普通となったが，à, chez も用いられることがある。

en に続くものが指示形容詞 ce, 所有形容詞 son の場合は使用が不可能では

ないが，これも書き言葉中心といえる。

従って現代語では人称代名詞，指示代名詞—これはいささか書き言葉的だが—，そして固有名詞を含む無冠詞の名詞句の前が en が用いられ易い位置となっている。注 5) の (i) にあげた用法は en の独壇場である。

7) この問題には，藤田 & 川口 (1987) で言及しておいた。本稿では扱わないが，Donnellan (1966) の referential/attributive use の区別，及びその Kleiber (1981), Furukawa (1986) などの扱いなどに問題を投げかける点が (14) とそれに先立つ考察に現われている。上掲論文と注 27) に挙げた諸研究参照。

8) (22) の Y は人を指す名詞とはいえないが，文型としては (21) と同じである。この場合はしかし〈X V Y en-Z〉の形にすることができない。

9) 次の例

(i) Il la [=Henrietta] regardait, penchée sur lui, et des vérités analogues lui apparaissaient. L'Henrietta qu'il avait aimée était *une petite fille de dix-sept ans qu'il ne retrouvait plus dans l'Henrietta d'aujourd'hui* (*Vallon*, p. 237)

では Y に伴うのは不定冠詞であるが，Y 自身が主文で主語の属詞の位置にきている。しかし今の所 (i) の分析を充分に行っていないのでこれ以上のコメントを加えられない。

10) 〈*the* Y that Z BE〉に Hawkins が与える構文分析は〈Z BE *a* Y〉からの転換を主張しており，意味的には〈the Y〉が Z と同定 identify されているので〈that Z BE〉が制限的に機能している為に定冠詞が現われるとしている。この predicational relative は Declerck (1984) が扱う predicational cleft (It is a teacher that he is, not a butcher! p. 139) と混同してはならない。ただしここでも種々のモーダルな要素が介入しているようである。

他方 (21)-(22) では〈comme un Y que Z ETRE〉の例を出したが，〈comme le Y que Z ETRE〉の形をもつ

(i) En voilà assez! Ne continuez pas à agir *comme le petit garnement que vous étiez*. Vous avez gandi depuis! (*Coupable*, p. 94)

は次の英文の訳である。

(ii) "Be quiet," she said. "Do not be *a silly, reckless little boy as you used to be*. You are grown up now." (Christie, *Ordeal*, p. 90)

(ii) の Y は不定冠詞を伴っているが，that のかわりに as が来た結果である。又この西訳は

(iii) —cállate—dijo—. No te portes *como el niño tonto e inqueto que siempre has sido*. Ahora eres un hombre (p. 111)

であるが siempre has sido ("you have always been", "tu as toujours été") が原文と異なるニュアンスを与えている。

11) (27), (30) は非人称構文であるが，判断主体 X が人であることは容易に想定できる。実際コンテクストでは facile, impossible de ne pas などの判断，従って〈Z BE Y〉の判断をする主体が明らかである。但し後でより複雑な事

実に言及する。

12) (38) の Z は人称代名詞 lui だが，先行詞に総称的不定名詞句 un enfant をとっている。

13) この例は藤田知子氏に御指摘いただいたものである。Merci.

14) 注 5) で en に続く Z が無冠詞名詞句のタイプと定名詞句のタイプ，という2つの特徴的形態をとるケースを見た。次の

(i) et ils l'écoutaient en hommes qui apprécient (Simenon, *Lognon*, p. 146)

は一見 X (ils), Y (l'), en-Z をとり V が écouter のように見えるが，Z の位置に無冠詞名詞句が来ているので，注 5) の (i) のタイプである。ということは2つの名詞句 N1 と N2 が〈N1 ETRE N2〉の関係をもつとき，冠詞の問題を別にすれば，〈N1...en-N2〉と，〈N2...en-N1〉の二つの形が存在することになる。前置詞ではあるが en はこのように同定，属性付与などの関係を示すマーカーと考えられるのである。

15) Olsson-Jonasson (1981) 参照。この構文は〈XVYZ〉で表わされるが，一般に Y が形容詞や無冠詞名詞のタイプに研究が集中する傾向がある。全く別の視点から研究として Eriksson (1980) があるが，彼の引く

(i) et on (X) devinait (V) leur maître (Z) un homme de sens et de bon goût (Y) (*loc. cit.* pp. 87-8)

を本文 (29) や次の

(ii) On devinait en lui un homme de cabinet. Un homme de dossiers et de fiches (*Destination*, p. 7)

と比較すると興味深い。

16) 川口 (1983) 参照。

17) Fuchs & Léonard (1979) 参照。

18) 本文では言及しなかったが，V には voir, reconnaître などの判断動詞の他に，(32) で見た sentir, そして

(i) Elle est assez vieux jeu, je crois, et *méprise* (V) en moi (en-Z) l'homme arrivé par ses propres moyens (Y) (Christie, *3 énigmes*, pp. 229-39)

(ii) En Amyas, c'est l'homme qu'elle *aimait*, et non pas le peintre (Christie, *Cochons*, p. 42)

のように感情動詞が来ることもある。この類は I タイプとも AP タイプとも言えないが，上例の Y は感情の対象となる Z の側面を指している。Y は属性であるといえるが，次の

(iii) Il respecte en Pyrrhus l'homme du diadème; Il respecte en Pyrrhus *Achille* (Y1) et *Pyrrhus* (Y2) même (Racine, *Andromaque*, v. 1465-6)

では「P ノ中ニ父親ノ A ヲ敬イ，ソシテ P 自身ヲモ敬ッテイル」ということで，Z と Y の関係が極限的である。つまり Z≠Y1 にも拘らずこれを同定し，又 Z と Y2 は同一名詞句であるのに Y2 の Y1 との対照及び même の介入により文を成立させている。また聞手の Marie にむかって

(iv) J'aime *une Marie* en toi

といえば「アル Marie」，何らかの属性によりとらえられた Marie ということになる。

(iii) や (iv) では〈Z ETRE Y〉をそのまま再構成することができないが，現在藤田知子氏が研究を進めている〈N1 ETRE N2〉構文(但し N1 と N2 は同一名詞句)の解明がこの問題にも光を投げかけるであろうことが期待される。なお上記「Z の側面」については Kawaguchi (à paraître) 参照。

[文　献]

コーパスの殆どは A. Christie の小説の Club des masques 版の仏訳を用い，英は大体 Fontana 版を用いた。以下研究書のみをあげる。

Culioli, A. (1981). "Rôle des représentations métalinguistiques en syntaxe". *Preprints of the plenary session papers of the XIIIth international Congress of Linguists.* Tokyo.

Declerck, R. (1983). "'It is Mr. Y' or 'He is Mr. Y'?". *Lingua*, 59.

Id. (1984). "Some restrictions in cleft highlight predicate nominal". *J. L.* 20.

Donnellan, K. (1966). "Reference and definite descriptions". *Philosophical Review*, 75.

Eriksson, O. (1980). *L'attribut de localisation et les nexus locatifs en français*, Göteborg, Kompendiet, Lindome.

Fuchs, C. & Léonard, A.-M. (1979). *Vers une théorie des aspects.* Paris, Mouton.

Furukawa, N. (1986). *L'article et le problème de la référence en français.* Tokyo, France Tosho.

Givón, T. (ed.) (1983). *Topic Continuity in Discourse.* Amsterdam, J. Benjamins Publ. Comp.

Hawkins, J. A. (1980). "On Surface Definite Article in English", in Auwera, J. van der (ed.) *The Semantics of Determiners.* London, Croom Helm.

Kawaguchi, J. (1980). "Une construction appréciative en "il y a" de l'anc. fr." *I. G.*, 5.

Id. (à paraître). "Aspect, existence et modalité—à propos de" p-koto-ga aru "en japonais".

Kleiber, G. (1981). *Problèmes de référence: descriptions définies et noms propres.* Paris, Klinksieck.

Olsson-Jonasson, O. (1983). "Thème, rhème, focus et la construction avec attribut de l'objet". *Lingvisticae Investigationes*, 5. 1.

藤田知子 & 川口順二 (1987).「N. Furukawa の冠詞論」.『フランス語学研究』, 21.

川口順二 (1983).「人称の概念について」.『日本語学』, II. 4.